

CLC からしだね書店便り



12 December
2024
no.48

* 今月のご案内 *

- ① 連載第 12 回 (最終回)
「子どもと大人のためのこころの対話」
—信仰と哲学—
+ 新連載予告『歴史と対話し、歴史に学ぶ』
- ② カフェトライアングル 今月からの新メニューのお知らせ
- ③ 秋のオンライントークライブ第二弾書き起こし
『本をめぐる対話』【前編】
- ④ 推薦本『変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから』

CLC からしだね書店では…

- 1 キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- 2 お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- 3 ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- 4 コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- 5 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- 6 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
- 7 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLC からしだね書店 & カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00
定休日 日曜日と年末年始 (※祝日も営業)
毎月第3木曜日は書店のみ営業

年末年始書店の冬季休業日

2024 12/28 (土) ~ 2025 1/5 (日)

子どもと大人のための対話

最終回
信仰と哲学
坂岡 大路

前回までのあらすじ……ここは哲学的な対話を楽しむカフェ「べれや」。「多様性を強調するあまり真理を喪失してはいけない」というキリスト教のパネルレットを見つけたタネオくん。しかしマスターは、「これがそが絶対の真理だ」という論法の危うさを指摘する。

タネオくん：……このパネルレット、本

当にたくさん「真理」という言

葉が出てくるので、思わず数え

てしまったんです。

からしきん：何回出てきたの？

タネオくん：2ページで25回だった。

からしきん：すごー！

マスター：ちなみに「真理」が最もたくさん出てくる聖書の箇所は「ヨハネの福音書」

なんだ。ちよっと調べてみよう。イエスが真理を使用した数は……21回。新改訳聖書2017だと55

ページほど。キリストですら「真理」という言葉を21回しか使わないのに、それをたった2ページで上回ってしまっただけ……。

タネオくん：「真理」という概念は、キリスト教徒にとってそれほど重要で……なのね。

からしきん：クリスチャンにとっては「真理」「イコール」「神の言葉」「ごまかす」「Youtube」でいろんなクリスチャンの意見を聞くところには自分の信念と相容れない人の存在や価値観を



全否定するような言葉を、平気で使う人がいるんだよね。そして、それを「真理だ」と言っている。でも「真理」

だったら何を言ってもいいの？相手の育ってきた歴史や

痛み、感じてきた想いに全く無感覚な言葉が、本当に「神

さまの言葉」なのかなあ？って、私は思っちゃうんだけど……。

だって、イエスさまは「私たち人間の視点まで降りてきてくれた神」

「相手の立場になってくれた神」

「でしよっ？神さまのこの無限大の愛を、人間の狭い枠組みに閉じ込めていいの？って思っちゃう。

マスター：聖書によると、神の言葉は人間に託される。これを「預言」と言っただけで、興味深いことに、「預言」だからといってパウロはこれを絶対化しないんだ。彼は、ある手紙でこう語っている。

マスター：この「吟味しなさい」のギリシャ語は「ディアクリノー」別の聖書箇所では「疑う」と訳されている言葉でもある。過激な訳し方をすれば、「神の言葉として語られている

預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。」(コリント人への手紙―第一 14章29節)

マスター：この「吟味しなさい」のギリシャ語は「ディアクリノー」

別の聖書箇所では「疑う」と訳されている言葉でもある。

過激な訳し方をすれば、「神の言葉として語られている



言葉を「疑え」「批判的に吟味・検討せよ」と言っている、とても誇りがある。

タネオくん：「吟味」かあ……。そう考えるとかなり受け入れやすい感じがします。

マスター：「ディア」は後に続く動作を強調する接頭辞。「徹底的に」「しつこく」といった意味だ。「クリノー」は「判断する」「しつこく意味なので、「ディアクリノー」は「徹底的に吟味して判断しようとする」といったニュアンスになる。

タネオくん：確認すると、人間は「物語」によって世界の秩序をつくり、集団にまとまりを与えようとする(連載第11回参照)。そうやって、自分たちの存在や生きることの意味を説明しようとする。これが「真理」の本質だ、というのがマスターの考えですよね。

からしきん：そうか。だから「ディアクリノー」が必要なんですね。その「物語」が、本当に「隣人愛(アガペー)」の精神に沿っているのかどうか。イエスの生き様が示しているような、異質な他者の隣人になる「姿勢」になっているのかどうか。それを問うために「吟味する」んだよね。

マスター：聖書は、「真理だから疑いな」と教えているのではなく、「真理を見極めるためにこそ批判的に疑い、その根拠を吟味せよ」と言っている。「何を信じていべきなのか、判断力を働かせて精査せよ」と言っている。これはくり返しみんなに伝えてきたとおりだ。そして、これは極めて哲学的

な姿勢だと、ぼくは思う。

からしきん：うーん、なんだかマスターとの議論で、ようやく「哲学」の意味がわかってきたような気がする。

マスター：ありがとう。タネオくんはどうだい？

タネオくん：正直、納得できていない部分もあるんですが、でも、その人が「真理」という言葉を使う時、それをどういう意味で使っているのか、その人がどんな方向にもっていかうとしているのかは、「ディアクリノー」する必要はあるなあ、とは思いました。

マスター：そこまで理解してくればそれで十分だよ。無理に納得する必要はない。哲学は「その人が納得するかどうか」だけで勝負するんだ。どんなに偉い先生が言ったことだとしても、「信じ込む」必要なんて一切ない。「この「フエアネス」こそが、哲学の精神なんだ。

からしきん：それって実は、「人間は被造物であって絶対の神にはなれない」とか、「偶像をつくってはいけない」とって、聖書の教えとそんなに違わない気もします。

タネオくん：そして、「神の名をみだりに唱えてはならない」(出エジプト記20章7節)。

マスター：「偶像を造らない」ために、「人を神にしない」ために、そして「異質な他者の隣人として生きる」ために、哲学は大いに役立つんだ。二人もこのツールを思う存分使いこなしてくれると嬉しいな。

今回のポイントをまとめます。

- ① 聖書は「預言（神の言葉として語られる人間の言葉）を批判的に吟味する」ことを勧める。ギリシャ語の「吟味する」は「サイアクリノー」であり、「疑う」と訳されている言葉でもある。
- ② 宗教者が「真理」という言葉を使う時、それをどいう意味で使っているのか、彼がどんな方向にもっていこうとしているのかは、「サイアクリノー」する必要がある。
- ③ 「偶像（絶対化された信念）を造らない」ために、そして「異質な他者の隣人として生きる」ために、哲字は大いに役に立つ

連載は今回で終了となります。一年間お付き合いいただきありがとうございました。最後に一言。



さかおか おおじ

1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。札幌市内の児童精神科で臨床心理士として勤務。本質研究会、哲学プラクティス学会、宗教倫理学会、キリスト教教育学会等の学術誌に論文掲載。札幌市若者支援施設youth+（ユースプラス）でワカモノ哲学カフェを主宰するなど、オンラインや地域で子ども・若者と共に哲学対話を行う活動に取り組む。

坂岡大路さん、

1年間ありがとうございました。

マスターの言うように、哲字は「その人が納得するかどうか」だけで勝負します。どんなに偉い先生の言葉だとしても、頭ごなしに「信じ込む」必要は一切ありません。否、むしろ「偉い先生の言葉だから信じる」のだとしたら、それは危険です。どうかみなさんも、この連載で行われた議論を「ディアクリノー」してみてください。

ちなみに、本連載で紹介された哲字（現象学）の思考とキリスト教信仰の関係については、すでに拙論で考察しています。関心のある方はぜひ、「キリスト教教育学会」のホームページを検索していただければ幸いです。『キリスト教教育論集』第30号および第31号に論文が掲載されています。

「子どもと大人のためのこころの対話——信仰と哲学」の連載が終わりました。

次回からは、新しい連載が始まります。

「歴史と対話し、歴史に学ぶ」です。今度は、叔父さんと甥っ子の対話形式で、話が進んでいくようです。筆者は香川大学名誉教授の中谷博幸氏です。どうぞ、お楽しみに!!

執筆者口上

現在日本をはじめ世界各地で、フェイク

ニュースが飛び交い、一部には「大義」のためにそれが肯定されると主張する人々すらいるようです。これは人間関係と社会を根底から蝕み、やがて深刻なニヒリズムに至るでしょう。もう一度事実の重みと大切さを認識する必要に迫られています。

新たな連載では、歴史に詳しいけれど人間関係を築くのが苦手な35才の叔父とあらゆることに好奇心旺盛な高校一年生の甥の対話を通じて、ヨーロッパを中心としたキリスト教の歩みを振り返り、謙遜の学である歴史のアプローチの重要性をともに考えたいと思います。二人は互いに離れて住んでいるので、ネットを利用しますが、叔父はラインが苦手でパソコンのメールを好み、甥は断然ライン派です。

初回は、グリユーネヴァルトの『イーゼンハイム祭壇画』が話題になります。

（もちろん二人は架空の人物です。念のため）



期間限定 2024 11/25 ~ 2025 2/28

チキンアップルドリア

チキンライスの上に、ベシャメルソース・リンゴ・チーズをかけた大人気一品!! **¥900 (税込)**

あつあつとろーり

冬はあつたか。

ホットカフェオレ **¥400 (税込)**

ほろ苦いコーヒーにミルクがたっぷり、やさしい甘さのホットカフェオレです。

カフェ **トライアングル** から 期間限定 新メニューのお知らせ

秋の書店フェア



「こどものための神のものがたり」
森住ゆき原画展

おかげさまで無事、終了いたしました。

森住ゆきさんご本人も埼玉から来店して下さり、期間中、お客様とお話がはずんでいたようです。「ナマの森住さんと会うことができ、舞い上がってしまって、買った本にサインしてもらおうの、忘れた！」とおっしゃるお客様もおられました。

展示原画の「11回 クリスマスおめでとう」の胸躍るような美しい星空とあかちゃんイエスの絵、「第12回 じゅうじかとふっかつ」の淡く寂しい夕暮の十字架の絵が、2枚並んでいるのを見て、「胸がいっぱいになりました」とおっしゃったお客さまもおられました。

「こどものための神のものがたり」、残り少なくなってきました。クリスマスプレゼントに、いかがでしょうか？



秋のオンラインアーカイブ配信のお知らせ

秋のオンライントークライブ 第一弾

「こどものための神のものがたり」制作秘話

2024年

11/21(木)

森住ゆきさん (ちぎり絵作家)

大頭真一さん (京都信愛教会)

・明野キリスト教会牧師)

安田正人さん (株式会社ヨベル社長)



第一弾 トークライブ

①



第一弾 トークライブ

②



第一弾 トークライブ

③

秋のオンライントークライブ 第二弾

「どんな本を出したいですか？本を通して人と対話する」

2024年

11/22(金)

米本 円香さん (いのちのことは社編集者)

水野 健さん (フリーの巡回牧師・クリスチャン

坂岡 恵 (CLC からしだね書店店長)



申し訳ございません。

音がきれいに録音できず、聞き取りにくくなりましたので、第二弾のライブ内容は2回にわたり、書店だよりに掲載いたします。

本をめぐむ対話

2024年

11月22日

(金) 15時〜

秋のオンライントークライブ 第二弾

「争いや分断の時代にあつて、
「どんな本を出したいですか?」、
「本と対話する私」
本を通して人と対話する私」

米本 円香さん (いのちのことは社編集者)
水野 健さん (フリーの巡回牧師・クリスチャン
坂岡 恵 (CLC からしだね書店店長)

「編集の仕事って、どんな感じですか?」

坂岡: 私の「編集者」のイメージは、サザエさんに出てくるノリスケさんなんです。

米本: イメージが昭和ですね…。ノリスケさんのようにイササカ先生のところへ原稿を受け取りに行くことはせず、今は原稿のやり取りは、メール主流です。いのあることは社の場合、編集者はいろんなことやっています。書き手を探して原稿を依頼すること、本の企画、設計、サイズ、ページ数、読者層の見極め、価格、原稿の編集、誤字脱字・文章のチェック、組版、校正校閲、スケジュール管理、入稿…。大きな出版社なら、専門の校正係や校閲係がいり、それぞれ担当があると思いますが、あとは、本の販売促進やイベントとの組み合わせなどを、著者や営業部と一緒に考えたりもします。楽しいです。

水野: 私が本を出す時の話ですが、以前は、赤字でチェックが入っていましたが、今はパソコンでの作業ですね。著者と編集者の関係はどんな感じですか?

米本: もちろん著者が主役なんですけど、編集者も陰ながら、「自分の本」というふうな思っていて、出来あがった時は、とてもうれいんです。書き手はその道のエキスパートなので、逆に編集者は読者奇りの立場で、本にかかわっています。

「自分の知らない分野の本・翻訳ものの本とかわる編集者の苦労」

水野: 自分の知らない分野の本にかかわるときは、たいへんでしょうね。米本: 神学などのアカデミックな分野、生活に密着した分野、読み物系などそれぞれに強い編集者がいます。

水野: 翻訳ものの編集は、すごく難しいと思つていますが? 米本: 学生の頃、いのちのことは社の翻訳本を読んで、正直、何が書いてあるのかわからなかった(笑)。うちの会社では翻訳ものは原文のとおり直訳を推奨する時代があったので、だから、なるべくわかりやすい翻訳がいいなと思って、ここをけています。

坂岡: たしかに、直訳的すぎて、ページ目で読むのをあきらめてしまう本もありますよね。じつは、原文がすごくおもしろい本だったら、本にもったいない。

水野: N・T・ライトの本を訳すのは、とても難しいと聞いていますが…。坂岡: 難解でアカデミックな原文をちゃんと理解して、英語のニュアンスや文化的背景もくみ取りながら、日本語に変えていく…。気が遠くなりそうですね。

水野: N・T・ライトの本を訳すのは、とても難しいと聞いていますが…。坂岡: 難解でアカデミックな原文をちゃんと理解して、英語のニュアンスや文化的背景もくみ取りながら、日本語に変えていく…。気が遠くなりそうですね。

水野: N・T・ライトの本を訳すのは、とても難しいと聞いていますが…。坂岡: 難解でアカデミックな原文をちゃんと理解して、英語のニュアンスや文化的背景もくみ取りながら、日本語に変えていく…。気が遠くなりそうですね。

水野: N・T・ライトの本を訳すのは、とても難しいと聞いていますが…。坂岡: 難解でアカデミックな原文をちゃんと理解して、英語のニュアンスや文化的背景もくみ取りながら、日本語に変えていく…。気が遠くなりそうですね。

「キリスト教系の本を出す出版社が、気を付けてほしい」

坂岡: いのちのことは社は、キリスト教系の中でもおもに福音派系の本を出してられます。キリスト教の本を出すことに特化して、気を付けなければならないことなどあるものなんですか?

米本: 出版できるものできないものと、見極めは必要です。今までのうちの社が守ってきたものを守っていくこと、でも、新しいことにも挑戦していかないとだめです。その兼ね合いは難しいです。わからなかったら、先輩の編集者に聞いたりしますね。うちの社が出す本だから安心して読めるという読者の層もありますので。

水野：翻訳の場合、著者によって、カトリック系、日本基督教団系、聖公会系、福音派系など、住み分けも必要だろうし、編集者も難しいでしょうね。なにより編集は社会の中で普通に暮らす読者が、何を求めているのかをキャッチする力が必要。

米本：今、出すべき本なのかうちよつと様子を見ようか？ 思い切って挑戦してみようか？ とかあります。

水野：編集者の研修はあるんですか？

米本：いろいろなテーマを取りあげて、社内でも定期的にやっています。

水野：今、LGBTQの問題がとて大きいですね。

【編集者個人の信仰的理解と、書き手の信仰的理解がぶつかるときの対話】

坂岡：とても幅広いキリスト教。その中の「福音派」もやっぱり幅広くて、いろいろな聖書の解釈や信仰的理解があります。書き手もいろいろな立場の人がいる。でも編集者の米本さんにも、米本さん個人の信仰として、大事にしておられるものがあるでしょう。全然違う立ち位置の書き手とやり取りするとき、どんなふうに対話されますか？

米本：私にも私が育ってきた教会があつて、信仰的な背景があります。ただ、書き手との対話の中で、「私が知っていることが正しい」ではなく、「他の立場の人から学ぶこともある」と思うようにしています。そうすると自分の世界が広がる。自分が正しいと思ってきたことと違うことを言う人にも、「それは違いますよね」と言い切ってしまうのではなく、いったん受け止めるようにしています。自分の知らない世界を知っている人との対話によって、別の世界が広がることもあるので大事にしたいと思っています。ただそれは、なんでも「いいね」にしてしまうことではありません。

自分の軸がしっかりしていないとぶれちゃう。本を作るうえでそれは大事です。

水野：書店員の立場としても、自分の考えと合わない、対立するような本は「こんな本、いらないんじゃないの？」と、どこか遠くに押しやりたくなることもあるわけですよね(笑)。でも、そういう本も比較して考えを深めるためには必要。欧米の本なんかは、全く違う立場の人が批評を書き合ったりします。日本ではなかなかない。「こんな本出して、どういうつもりだ」と、苦情がきたりすることはありませんか？

米本：苦情がくるのは、まだましな方で…(笑)。苦情によって、みんな話題にして話し合っけなりましたから。一番困るのは、「なき」の状態です。波も立たない。

坂岡：波も立たないのに、水面下では煮えくり返ってるとか。でも「こんな本出すな」と批判するなり、まず読んでからにしてくださいって、思います。テーマやタイトルや著者名だけ見て批判するのではなくて。

【受け入れることに慣れているクリスチャンたち。】

疑問をもって、本を讀む。神に疑問をぶつける。

坂岡：私は、読書は自分との対話だと思っています。読みながら「私はこう思うな」とか「これは違うな」とか、自分自身を整理して新たな発見をする。キリスト教系の本を読むクリスチャンの読み方として、「私の大好きなエライ先生の書いた本だから、全部正しい」とすべてそのまま吸収しようとする読み方があるような気がしますが、でも、どんなにエライ牧師さんでも、人間ですから。本や牧師を偶像にははいけないと思っんです。

米本：自分自身もそうなんですけど、クリスチャンって、受け入れることに慣れているというか、教会で語られる「正しい」と言われることを反発せずに受け入れることに慣れていて、疑問を持つことに慣れていないように思います。学生時代に、自分の信仰の姿勢を変えてくれた本があります。フィリップ・ヤンシーの『神に失望したとき』という本です。自分の置かれた厳しい現実や、望んでも与えられないことの意味に対して、神に疑問を持つ。神をさらによく知るために疑問を持つのは、とても大事だと、そのとき思いました。疑問をもつことで、さらに深めていく。それを誰かと分かち合い、対話することで、世界を広げていく。

水野：フィリップ・ヤンシーはジャーナリストとして、とても面白い視点をもっていますね。

【デジタルなものとの向き合い方 編集者の心意気】

坂岡：最近、出版の世界もデジタル化されて、たとえばAが文章を作るという時代になっているのですが、そのあたりは、編集者としてどうですか？

米本：デジタルとの向き合い方、用い方したいかなと思います。今は、長い文章の要約をAに頼むと、指定した文字数に収めて要約することもできるそうです。作業面で効率化をはかるために用いられたいと思います。それがメインになったら怖いので気をつけています。大まかな意味を知るためにAに翻訳をしてもらうこともありすが、そのまま出せるようなものではないですし、やはり編集者の手が必要になってきます。

水野：最近、電子書物もたくさん出ています。紙の本は出さずに、電子書籍のみで売る人もいます。そちらの方が楽だし簡単だし安いし。

でも読んでいて「ちょっと足りないな」と思うことがある。そこに編集者が介在しない問題点と、気軽に出版できて気軽に買ってしまうことが、いいのかわるか…。

米本：いろんな人が簡単に電子化した書物を作れるというのも善し悪しがあると思うんですが、編集者は読者寄りの立場で、書き手とやり取りしながら、その考えていることを大勢の方に届けるために、橋渡しの仕事をしています。そこに編集者の意義を感じていただけなら嬉しいです。だから、まだまだ編集者は必要な職業ではないかと思っています。

水野：いのちのことは社の本は、電子書籍化してるんですか？

米本：すべての本ではないですが、電子向けの本などはデジタルで読めるようにしています。聖書なんかも。

【聖書もデジタルな時代】

坂岡：聖書が電子書籍化された当時って、すごく抵抗もあったと思うんですが、水野さんどうでしたか？

水野：最初はそうでした。でも便利ですよ。

坂岡：若い牧師さんたちが、牧師会の席で、高齢の牧師さんに気をつかいながらこっそりタブレットを開いていた、というのを聞いたことがあるんですが。

水野：最近、外国から来るクリスチャンの学生も、聖書をもって来なくなりまし。

坂岡：若い人たちは、礼拝でも、聖書はデジタルなんですかね？

米本：水野…スマホで、指で、こうやってますよ。

坂岡：そういう時代になってきているんですね。それは、信仰の問題というよりは、育ってきた年代の違いというか…

米本：ある旅先の教会で、アプリで聖書を開いていたら、その牧師さんが無言で私の目の前に聖書を差し出されたこともありました。(笑)

坂岡：そこは、世代間ギャップというものもあるので、私も自分自身を戒めないといけないですが(笑)

米本：それこそ、対話が必要ですね。

坂岡：その時代その時代の文化だったり、教育だったりで、「紙のもの」に対する価値観みたいなものも違うと思うので、「信仰的態度」とは切り分けて考えたいです。

水野：本についての価値観も、生まれ育った環境が影響すると思っんです。私は妻が本を読んでいる姿がいいな、と思って。

坂岡・米本：(笑)

坂岡：そこに惚れたと…(笑)

水野：それが、もしスマホで指で、スワイプ、スワイプだったり、ちょっと違ってたかも。本を読む人と読まない人が分かれる時代になってきましたね。

【絵本の読み聞かせはやっぱ紙、紙。

でも、中高生はデジタルネイティブ

米本：でもね、絵本はなくならないんですよ。子どもたちの読みかせが、デジタルに変わるといえることはないかと思えます。小学生もまだ、学校で読書の時間があったりします。ところが、デジタルネイティブと言われる中高生の子たちは、動画だったり、アプリの情報主流なのかな？うちも中高生向けに本を出しますが、なかなか売れません。本がよくて動画がダメというわけではないと思えますし、デジタルネイティブの世代は、情報収集の仕方、そでない世代とは違う、独自のやり方がありますし、そこは私たちも学ぶべきところだと思います。ただ、本を作るものとしては、まだ活字に期待したいというのがあります。

【後編に続く】

おすすめ 推薦本

『変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから』

著・清水義晴 / 構成・文 小山直 出版：太田次郎社エディタス

本体 1000円＋税



清水義晴さんの町づくり

は、弱さを絆にした仲間

づくりからはじまります。

過疎化が進む町のワーク

ショップと呼ばれたときの

こと。お互いの自己紹介を

かねて「この紙一枚でみなさんのまちを表

現してみてください」と課題をだしたそう

です。考えた末白紙のまま提出し「何もな

い町です！」と笑いをさそう人。紙をねじっ

てまけてしわしわにして浜辺に流れ着く昆

布(地元の名産)を表現する人。笑いや驚

きが飛び出してくる。弱いこと、小さいこ

とが人とつながる強みになる。そうやって

フツフツと育っていく場の力。そんな関係

性を育てる努力をされてきたということが清水さんのかかわってきた町づくりの魅力なのではないかとこの本を読みながら思いました。現場のひとりひとりが生きた細胞のように役割を見つけ、結果として全体が活性化していく。そんな魅力的な事例が取り上げられた本です。

この本が源流となつてつくられた『降りていく生き方』という映画があります。映画の中心を流れているテーマは「発酵と腐敗」。迫ってくる資本主義の濁流を前にして吹けば消えてしまうような小さな者たちが弱さを絆に集うと、今度はフツフツと発酵して命をとりもどしていく、そんな希望のメッセージを伝えてくれる映画でした。

ここで監督は清水さんのいう「場の力」を発酵にたとえたのかなと思っっています。私も我もと頂点を目指して登っていく社会には限界があるといっているのかもしれないように、そんな息苦しい社会にならないように、腐敗から発酵へのゲームチェンジとして、酸素と水をいれて時々かき混ぜてやる。

「場の力」を引き出すためにこの本で清水さんが語っている変革とは、そんな絆づくり、仲間づくりのことなのではないかと思っしました。著者にインタビューを重ねてこの本を書き上げた小山直さんの文章は魅力的でテンポよくぐいぐい引き込まれます。ぜひお読みください。

(C)からしだね書店を応援する近藤栄恵さん

2024/11/13



トークライブでお話ししてくださった水野健さんの著書が発売されました是非お買い求め下さい!!



キリスト教の終活のおはなし

水野 健

「キリスト教の終活セミナー」として各地で話してきたことをまとめた小冊子。自分の人生を振り返り、与えられた良きものを再発見し、生きてきた恵みを味わうよう導く。葬儀や埋葬など実際なことにも言及してある。

(<https://www.kyobunkwan.co.jp/xbook/archives/115821>) から

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。(受付できないものもありませんので事前にお知らせください)



百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌、
自分史・教会の記念誌などは受け付けておりません

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本(多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX：075-574-0025
Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②住所③電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

林雅美様 平井紀子様 福本佐和子様 対島英夫様 芋木美代子様 玉田耕治様 藤井久美子様
匿名2名様(願不同)

11月のリサイクル本の収益は30,212円でした。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】
献本くださった方のお名前を書店便りにご紹介させていただきたいと思っております。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆2024年もあとわずかとなりました。今年は元日早々、能登で大きな地震が起こり、その後、追い打ちをかけるような台風による水害……。いまだに放置されたままの家屋がたくさんあることに心が痛みます。◆じつは、かつて珠洲には原発建設の話があり、それを命を賭して食い止めた人達がいたことは、地元以外ではあまり知られていません。◆キリスト教書店関連では、閉店した書店、廃刊になった月刊誌や新聞が、いくつかありました。新しく創刊されるものがあまり見当たらないのは、残念なことです。◆そのかわり、YouTubeなどSNSでの発信はどんどん増えています。からしだね書店でも、遅ればせながら動画配信にも挑戦しています…が、会場の設定、音声の問題、編集の仕方、思わぬトラブルにどう対処するか…そう簡単なことではないと実感します。教えてくださいるボランティアさん募集中です。◆皆さま、あたたかなクリスマス、新年をお迎えください。来る年、世界が一步でも平和に近づきますように。

【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りの
バックナンバーはこちらから